

熊本野生動物研究会の歩み

第二高校 長野 清

1985年熊本県教育委員会は環境庁、林野庁、文化庁の依頼を受け、特別天然記念物ニホンカモシカの熊本県内での生息分布調査を行なった。その調査も終わりに近づいた頃、調査員の中から「このまま、この調査団を解散してしまうのはもったいない。」という発言が自然と発生した。調査期間二年のうち、のべ日数にしてほぼ一ヶ月苦勞を共にした仲間意識、その間に培われた自然に対する新たな認識、それに厳しい生活を強いられたつづある多くの動植物への保護意識がそうさせたのであろう。

さらに、予定されているカモシカ特別調査の態勢を維持しておく必要もあった。これは、カモシカ生息分布調査の指導をしていただいた小野勇一九州大学教授をはじめ、土肥昭夫九州大学助手、岩本俊孝宮崎大学助教授など、多くの方々へのご恩返しにもなることであった。そこで、1985年11月に次のような内容で、関心をもっている人たちに対して案内状が出された。

～熊本野生動物研究会発足会のご案内～

時下皆様方は益々ご清栄のことと存じます。

さて、私たちは、下記の通り発足会を開催することになりましたのでご案内申し上げます。本会は、会員相互の情報交換と親睦をはかり、野生動物の調査研究を行うこと、ひいてはそれを通じて自然へのより深い理解を求め、自然教育の発展に寄与することを目的にしたいと考えています。

熊本の野生動物に関心をお持ちの方々のご参加をお待ち致します。

記

1、日 時 12月7日(土)16～18時

2、場 所 熊本県青年会館 熊本市水前寺3-17-455

※尚、会終了後、懇親会を予定しておりますので懇親会参加希望の方はそのつもりでお願いします。

昭和60年11月30日

主催者 中園敏之 永田瑞穂 高野茂樹

長野 清 歌岡宏信 藤吉勇治

れなりの理由があった。当初「野生動物」の名称を考えたが、熊本県内にはすでに熊本記念植物採集会や洞穴研究会、熊本野鳥の会など実績を持つ会があり、これらのすばらしい会の領域に立入ることはできないと判断された。そこでニホンカモシカが哺乳類であり、この分野であれば、何とかご理解していただけるであろうということで「熊本野生動物研究会」(略称：熊野研)となったのである。しかし、当然のことながら、植物をぬぎに動物を考えることはできないので、植物に関心を持つ人も参加していただくことにした。

発足会は1985年(昭和60年)12月7日予定どおり開催され、30名が参加して次のような会則ができた。

熊本野生動物研究会会則

1. 本会は熊本野生動物研究会と称する。
2. 本会は会員相互の情報交換と親睦を計り、野生動物の調査研究をおこなうとともに、これらを通じて自然に親しみ自然教育の発展に寄与することを目的とする。
3. 本会は、会の目的に賛同し自発的に参加する会員によって組織され、会長、副会長、事務局、監査、運営委員(若干名)を置く。
4. 本会の目的を円滑に達成するため、顧問を置くことができる。
5. 会費は年2千円とする。但し、学生は年千円とする。
6. 本会の目的を遂行するために次の事業を行う。
 - (1) 会誌発行
 - (2) 発表研究会
 - (3) 調査研究会(観察会、見学会等を含む)
 - (4) 総会
 - (5) その他必要と判断されたもの
7. 会期は1月1日に始まり、その年の12月31日までとする。
8. 会則の変更は、運営委員会で協議し総会で決定する。

本会の名称を「熊本野生動物研究会」としたのは、そ

さらに、顧問に吉倉 眞 熊本大学名誉教授、事務局長に中園敏之氏、監査に大塚 勲氏を選出した。その他に会の事業運営のために運営委員会を設置した。会費については、その後3千円(学生2千円)になった。

1990年度に初代会長に入江照雄氏、そして1991年度の会長は西岡鐵夫氏である。本会の会則は前記のようになっているが、とくに会としては若い人に参加を呼びかけ、会の調査研究に参加し、また、お互いの個人の調査研究活動に協力しあうなかで、調査研究の方法を学び、自分の研究テーマを発見することや、現在行なっている各自の調査研究の参考にさせていただくことを願っている。

本会の重要な事業の一つである調査研究は、会員の調査能力の向上を目的に行われているが、同時に会員相互の懇親の意味もあり、効果を上げている。

本会の調査研究の中で最初なのは、牛深市大島における野生化したカイウサギの生息密度調査であった。この調査では、植生調査や昆虫調査も行なわれた。

その後行われた調査研究や観察会は次のとおりである。

1986年3月5～6日 4名

カイウサギ予備調査(牛深市大島)

〃 3月27～29日 12名

カイウサギ調査(牛深市大島)

〃 8月16日 8名 ムササビ観察会

1987年3月27～29日

カイウサギ調査(牛深市大島)

〃 9月19～20日

オヤニラミ観察会(七城町清水)

〃 10月31～11月5日 14～15名

熊本県カモシカ生息分布特別調査

〃 12月15日 1名

ツキノワグマ出自調査(大分市)

〃 12月25～27日 3名

ツキノワグマ生息調査(大分県祖母傾山)

1988年3月5～6日 8名

タイワンリス観察会(大分県佐賀岡町高島)

〃 5,6,8,10月 5～19名

熊本県カモシカ生息分布特別調査

1989年3月4～5日 9名

ニホンザル調査(阿蘇郡久木野村)

1990年3月3～5日

ニホンザル調査(阿蘇郡久木野村)

〃 5月26～27日 12名

カイウサギ調査(牛深市大島)

〃 5月26～27日 2名

大島の昆虫調査(牛深市大島)

〃 5月26～27日 1名

大島の植物調査(牛深市大島)

〃 6月23日 12名

ムササビ観察会(矢部町男成神社)

〃 3月29日 4名

キツネラジオトラッキング調査(矢部町)

1991年2月11日 14名

カモシカ観察地点予備調査(矢部町)

〃 3月3日 15名

キクガシラコウモリのバンディング調査

(甲佐町風神社)

(今後の予定)

野生動物の都市定住化現象の研究(熊本市周辺)

野鳥の渡りの観察

会員の研修としての談話会がある。これは、1990年から計画され、各分野の第一人者を講師として招き、学習を深めようとするものである。

1990年6月23日 ムササビの行動と習性について

講師 大分医科大学 馬場 稔氏

1991年12月14日 ネコの社会構造

講師 九州大学 土肥昭夫氏

また、本会の総会時における会員研究発表は、会員相互の情報交換と活動意欲の励みとなっており、その項目は次のとおりである。

第一回(1986-2-15)～熊日地下会議室～

(1) 熊本県におけるニホンザルの生息分布……藤井尚教

(2) 野鳥の現状……田中 忠

第二回(1987-1-17)～熊本市みゆき会館～

(1) カイウサギ糞消失率算出について……坂田拓司

(2) 牛深市大島カイウサギ調査報告……藤吉勇治

(3) 牛深市大島の植物について……高野茂樹

(4) カニの生態について……鎌賀厚次

(5) 鳥について……坂梨仁彦

第三回(1988-1-17)～熊本市青年会館～

(1) マレーシアの自然を訪ねて……高野茂樹

(2) ビデオ記録「市房カモシカ調査」……松岡秀樹

(3) オヤニラミ生態調査中間報告……歌岡宏信

(4) 九州におけるコウモリ類の生態……入江照雄

第四回(1989-2-4)～熊本県青年会館～

- (1) 1987～1988年度カモシカ生息調査報告……長野 清
- (2) 海跡動物について……………入江照雄
- (3) キツネの土地利用パターン……………中園敏之
- (4) デジタイザの利用法について……………歌岡宏信
第五回(1990-2-10)～むつみ荘～
 - (1) コメツキガニの巢孔の奪い合いについて
……………鎌賀厚次
 - (2) 熊本県鳥類分布の集大成
「熊本県鳥類分布集(予報)」……………坂梨仁彦
 - (3) 陸生等脚類の研究と教材化……………木下信博
 - (4) カンテンコケムシについて……………甲守 崇
 - (5) 天然記念物「ゴイソツバメシジミ」
の生態と保護について……………大塚 勲
- (5) プロッタの利用法について……………歌岡宏信
第六回(1991-1-26)～熊本動物園資料館～
 - (1) アカハラダカ, サンバの渡り(自作VTR資料)
……………田中 忠
 - (2) シラサギの就蒞前行動……………六嘉龍一
 - (3) スナガニ科のゾエア放出時の行動とリズム
……………鎌賀厚次
 - (4) 洞穴クモ「ユウレイクモ」について……………入江照雄
 - (5) 馬見原に滞在したヒトリザルの生活場所と
行動パターン……………中園敏之

会員相互の情報交換や、会の報告や連絡のために機関紙として「SIGN POST」がある。

「SIGN POST」の本来の意味は動物たちが尿や糞、臭線による臭いづけをすることにより、お互いの情報交換をしている地点、あるいは物体のことである。例えば、目立つ岩や塚、木の根などが使われる。いわば人間社会における伝言板のことである。創立から今日までの、本会の活動はすべてこれにまとめられている。この「SIGN POST」の内容をいくつか見てみると、会の調査報告、観察会のほかに次のようなものがある。

1987年11月球磨郡水上村において、起立不能の状態
で保護されたニホンカモシカの治療経過報告(秋山, Vol. 2-No. 3), 1987年11月24日大分県大野郡緒方町の祖母・傾山系で捕獲されたツキノワグマに関する二つの調査報告(歌岡, Vol. 2-No. 3), 白髪岳動物調査に関するもの(中園, Vol. 2-No. 3), タンパク質分解酵素を使用した骨格標本の作成方法と外部・頭骨測定法(中園, Vol. 4-No. 2), 1990年オオシャミセンガイの発見記録(長野, Vol. 5.-No. 3)などをあげることができる。その他に1989年Vol. 4-No. 3から連載している阿蘇郡久木野村清水寺本田清孝氏寄稿の「阿蘇生物季節」がある。これに

は、1964年(昭和39年)から現在までの、年間を通じた動植物の変遷が綿密に記録されている。また、最近のデータ処理に欠かせないコンピュータについて、本会で保有するデジタイザ、プロッタの利用法についての紹介がある。(歌岡, Vol. 4-No. 1, 歌岡, Vol. 4-No. 3)

本会の発足から早くも6年目を迎え、着々と当初の目的を達成する力を蓄えつつある。会員は県内に散らばっており、それぞれの研究テーマを持って、さまざまな活動をしている。一方で、会員の理解により調査能力の向上のため、個人レベルでの四輪駆動車の保有、野外調査やパケット通信のためのアマチュア無線免許の取得がすすめられている。また調査データ処理のためのパソコンの導入を進めたり、会員からデジタイザ、プロッタの寄贈もあり威力を発揮している。最近では、会員の中から野生動物の本当の姿を見たいという声が広がり1991年7月24日から8月14日まで、アフリカ研修に出かけるにいたった。10月から1月にかけての新聞連載をはじめ、現在ビデオやスライド教材を作成中である。

このように、いつの間にか野営のための装備、機動力、調査員の動員力など、どれをとっても県内有数の組織といえるまでに成長しつつある。この間の集大成となるものがこの会誌である。会員は皆、これを契機に学術的な力をさらに向上させていきたいと考えている。